

# 北の鉄道風景

Train number; 2596M

2024.10.17 17:33

0.8sec, f/5.6, ISO 640, f=24mm, Daylight/Sunny

8256×5504 Raw

## 第136回

### 彗星夜話

長い列車が夜のプラットホームで背伸びをしていた。そこに吊り下げられた行先標には遠い町の名が書いてあり、天井から繰り返し響いてくる老練なアナウンスは、さあ乗ってしまえと急かす呪文のようであった。さらにデッキの脇の列車愛称標が「銀河」、「明星」、「月光」、「金星」など、夜空をイメージさせるものであればもう言うことはなかった。

そんな夜汽車と夜空の共演を写真として残しなかったが、それは無茶な

話といつしか悟り、「北斗星」の上段個室寝台を取って照明を全部消して仰向けに寝て夜空を見た。カーブする度に向きを変えながらずっと付いてくる七つの輝きは今でも記憶の中で鮮やかだ。

子供の絵本にでてくるような一枚の絵として夜汽車を撮るのは不可能という私の結論に疑問符が付いたのは二〇二四年秋だった。紫金山アトラス彗星は肉眼でもはつきり見えた。これなら



満天の星空の下、走り続けた列車の車窓に夜明けの北の海が広がった。夜行列車の醍醐味だった。函館本線 2011



写真と文＝眞船直樹

列車と共演できる！秋の西日を浴びて輝いている電車に飛び乗り、西の空が開けた駅で降りてその時を待った。列車の方は「彗星」も「北斗星」も、とうの昔に走り去り、宵の通勤列車に付き合ってもらうしかなかったが、好きな鉄道と宇宙の共演を見たかった。

陽が西の林に沈むと東の空に大きな月が昇った。明るすぎて星空観察には悪条件になってしまったが、次はないから撮るしかない。列車が通り過ぎる度にシャッターを切る。そのたび、肉眼よりはつきり彗星を捉えられるデジタル画像で確認するが、そこに彗星はなかった。十七時を過ぎ、やっと西の空の夕焼けが深い色になり金星が輝き始めたが、十七時十四分通過の列車の上空にも彗星は無かった。やがて時計は十七時半を過ぎた。しかも悪いことにちょうど彗星が出る辺りに雲が湧いてきた。これはだめかと思った時、踏切が鳴った。シャッターを切った。画像を確認する。あつと声を上げる。そこにはへび座を突っ切る光の尾がはつきり捉えられていた！小さな星の鉄道という文明が、大宇宙と共演する姿が確かに記録されていた。